

## 比較舞踊学会 第27回大会報告

日 時 2016年11月26日(土)～27(日)

テーマ 継承される文化・身体表現

会 場 沖縄県立芸術大学 体育館 1日目 ワークショップ  
奏楽堂 2日目 一般研究発表・特別講演・特別企画

### 《ワークショップ》

#### 「伝統“エイサー”」

実演・講師：平敷屋エイサー保存会（うるま市勝連平敷屋）

### 《一般研究発表Ⅰ》

座長：森田ゆい（日本伝統芸能教育普及協会《むすびの会》）

1. シカゴ万博（1893）におけるフラ - 民族舞踊の越境とその歴史的意義をめぐって -  
目黒志帆美（東北大学大学院国際文化研究科フェロー）
2. 小森敏（1887-1951）から藤井公（1928-2008）・利子（1937- ）へ  
- 帝劇歌劇部に移入されたバレエの行方 - 杉山千鶴（早稲田大学スポーツ科学学術院）
3. スペイン人舞踊家ラウールの歴史と功績  
萩山幸子（武蔵野美術大学）
4. バズビー・バークレー（1895-1976）の邦画に与えた影響  
- マキノ正博（1908-1993）監督『ハナ子さん』を事例として -  
内田一良（早稲田大学スポーツ科学研究科）

### 《一般研究発表Ⅱ》

座長：佐々木玲子（慶應義塾大学）

5. 「物理療法と運動療法を併用したバレエ障害治療の臨床試験報告」  
- バレエダンサーの筋腱炎症治療への新たなアプローチについて - 里見悦郎（ハルピン医科大学）
6. エネルギー代謝からみた「学校ダンス」における上肢運動の効果  
永野順子（文化学園大学衣環境学研究所）・安広美智子（聖徳大学）・岸田眞弓（聖徳大学短期大学部）  
井上文子（聖徳大学）・佐藤純（聖徳大学）・村岡佳与子（聖徳大学）
7. ユニゾンの群舞におけるダンサーの立ち位置と鑑賞者の注視点についての基礎的研究  
中村恭子（順天堂大学）

《一般研究発表Ⅲ》

座長：波照間永子（明治大学）

8. 八重山舞踊「かしかき」構成譜作成の試み - 琉球古典舞踊との比較から -  
山里静香（沖縄県立芸術大学芸術文化学研究科）
9. 冊封使祝宴「1719年 中秋宴」の演目に関する一考察 ～中国民間舞踊をてがかりに～  
樋口美和子（沖縄県立芸術大学芸術文化学研究科）
10. 扇子舞「かぎやで風」から女踊りへの展開 - 沖縄本島村踊りの伝承を事例として -  
小橋川ひとみ（名桜大学非常勤講師）

《一般研究発表Ⅳ》

座長：澤田美砂子（日本女子大学）

11. 「阿波踊り」の統一的集団舞踊への変容  
小林敦子（明治大学情報コミュニケーション研究科博士後期課程）
12. 学校教育における地域伝統芸能と表現運動のかかわりに関する研究  
嶋崎綾乃（八戸学院大学）・根城隆幸（八戸学院大学）
13. 琉球舞踊ステージプロの存在 - 海外ステージプロとの比較 -  
オリバレス・ジュリア愛美（沖縄県立芸術大学音楽芸術研究科）

《特別講演》

「首里王府の“おもろ”」

講師：安仁屋眞昭（王府おもろ15代目継承者）

司会：花城洋子（沖縄県立芸術大学）

《特別企画》

「今日継承される古典女踊りの二通りの体使い“ガマク入れ”の有無」

司会・解説：高嶺久枝（沖縄県立芸術大学）

実演：八重山舞踊 山里静香（沖縄県立芸術大学芸術文化学研究科）

琉球古典舞踊 樋口美和子（沖縄県立芸術大学芸術文化学研究科）

## 大会企画報告

＜司会者挨拶＞

大会実行委員長 花城洋子（沖縄県立芸術大学）

本大会のテーマである「継承される身体表現」に寄せて、沖縄の伝統的な芸能・舞踊から「エイサー」「おもろ」「琉球舞踊」を大会企画として取り上げた。これらの講演・実演を通じて沖縄の現在の姿を垣間見た今回の大会で、温故知新について改めて意識させられた感があった。以下、3つの企画について概要を報告する。

### 《ワークショップ》 「伝統“エイサー”」

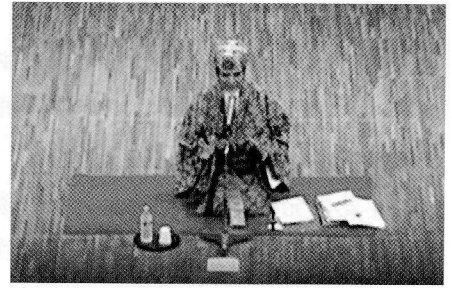
平敷屋エイサーは念仏踊りの流れを汲んでいると言われ、太鼓打ちの黒と白を基調とした装束と踊りの型は他地域に見られない独特なものである。ワークショップでは平敷屋エイサー保存会による「伝統“エイサー”」の実演、そして、エイサーの基本を学ぶワークショップが行われた。これまでエイサーの伝承を途絶えさせず守ってきた保存会の方々の情熱、長年培われた身体表現の素晴らしさが演舞に反映されていた。参加者は伝統の踊りを体験でき、貴重な学びとなった。

実演演目：①秋の踊り、②七月節、③二合小節、④中田作節、⑤沖縄めんそーろー、  
⑥桑むい節、⑦白雲節、⑧ケーヒットリ節



## 《特別講演》「首里王府の“おもろ”」

安仁屋眞昭氏（王府おもろ15代目継承者）を講師に招き、首里王府で編纂された古歌謡集の内容や歴史について概要を学ぶ機会となった。また、「おもろ」を謡うことが任務であったことから、今回、神歌主取（オモロ ヌシドゥユイ）が謡う古歌謡の唱えの披露もされた。



### おもろの世界（安仁屋眞昭氏の資料より抜粋）

「おもろさうし」は琉球王府で編纂された古歌謡集である。内容は、琉球の開闢神話から琉球王朝の祭政一致時代の祝詞をはじめ、天体賛歌、英雄賛歌、歴史的事象、航海安全の祈り等を含む叙事詩である。殆どの「おもろ」に節名が付いていて、かつては、メロディを持ち謡われていたようである。大和の「万葉集」も謡われていた歌もあったといわれるが、編集のときには、メロディの記載はなく（曲の記録方法が確立していなかったのであろう）、歌詞だけの記録集になった。「おもろさうし」もメロディはほとんど伝わっていないが、王朝の儀式・祭礼のとき謡われた「おもろ」のうち、五曲だけ伝承されている。王府に「神歌主取（オモロ ヌシドゥユイ）」という役職を置き、「おもろさうし」の管理と儀式・祭礼の時の「おもろ」を謡うことを任務とした。安仁屋家が代々世襲で「神歌主取」を務め、明治の始め琉球王朝廃朝の時まで継承した。初代は1616年生まれ、安仁屋親雲上（アニヤ パーチン）で、最後の「おもろ主取」は13代の安仁屋眞刈（1837～1916）である。

「おもろ」の語源は「思い」（ウムイ）あるいは「思（ウムル）」を「おもろ」と表記したというのが定説である。

## 《特別企画》「今日継承される古典女踊りの二通りの体使い“ガマク入れ”の有無」

ガマク（沖縄の方言）とは、広義には腰を意味し、女踊りの技法“ガマク入れ”の場合は、脇腹辺りのくびれた部分に体幹を傾斜し息をつめる所作で、琉球舞踊の女踊りを特徴づけ、頻繁に演じられる典型的技法である。しかし、琉球舞踊の一部の流派や、そして御冠船踊り（琉球古典舞踊の母体）の影響も受けたと考えられる八重山の古典女踊りには、この“ガマク入れ”が見られない。今回、“ガマク入れ”有りの琉球舞踊と無しの八重山舞踊を取り上げ、踊りの表現性や印象等の比較を行った。“ガマク入れ”の視点から見ると、曲線的な印象の琉球舞踊に対して直線的な八重山舞踊ではあるが、両者それぞれの女性の思いが表現されて興味深いものがあった。継承される段階で変化する体使いが「どのように」、「なぜ」といった提起は、今後の舞踊研究に期待したい。また、質疑応答では短い時間の中でフロアからの質問が活発にみられ有意義であった。



琉球舞踊「かせかけ」



八重山舞踊「かせかけ」